

ブラウニング夫人「ポルトガルのソネット」

大庭千尋

一八四六年九月十二日、ブラウニングはバレットとの結婚を敢行した。もしも、バレットの健康がブラウニングを除く周囲の誰かが深く懸念していたように、この結婚によつて、更に彼女の病状の悪化をみるようなことがあつたならば、ブラウニングは、その無思慮と性急さとを非難され、世の冷酷な痛罵を一身に浴びなければならなかつたことであろう。ブラウニングは深く自ら信ずることが出来たようであつたが、二人の秘密の結婚と、それにつづく長途の旅に、彼女の健康が果して耐えることが出来るか否か、内心人知れぬ不安を禁ずることは出来なかつたであらう。九月十九日ロンドン出發、ルアヴォール、ルアンを経由パリに行き、それよりオルリアン、シヤロン、リヨン、マルセイユを通つて海路イタリアへ向い、ゼノア、レグホルンを過ぎてピサに到着、ピサのコレジオ・フェルデナンドに到着き、そこで幸福な家庭生活に入ることになつた。新居はこの町の斜塔の近所であつた。繊細に病弱な妻の健康が、長途の旅に耐えることが出来たのも、ブラウニングの強い愛と固い信念が預つて力あつたことは見逃すことは出来ない。

その頃の二人の生活に於て、三度の食事は近所の料理屋から運ばれていたが、朝の食事が済めば、彼女は二階の部屋へ、彼は食堂にある文机に向うのが常であつた。そして晝の食事時まで讀書と詩作に餘念がなかつた。或る朝、バレットは食堂を去り、ブラウニングは窓の近くで食器の片付けられるのを待つていた。女中も立ち去つたと思われるのに、誰か彼の後にやつてきたような氣がした。すると彼が後を向かないように両手が彼の肩にかけ

られ、何か小さい紙包みがポケットの中に入れられた。この紙包みこそ、バレットが婚約時代に書き、その時まで一度も見せたことのない十四行詩であつた。この十四行詩が「ポルトガルのソネット」“Sonnets from the Portuguese”である。バレットにとつて「牢獄」のような所、テニスにとつては「寂しい不愉快な通り」であつたウインポール街の自宅に於て、ブラウニングから二十ヶ月に亘つて求愛されたエリザベス・バレットの優しき魂の告白は、この「ポルトガルのソネット」の中に秘められている。初めこの詩篇は「バレットのソネット」“Sonnets from Portuguese”とさう題で私版で出たが、三年後、ポルトガルの「カタリナからカモエンス」“Catarina to Camoens”という詩篇から暗示され、それがポルトガル詩人に囚んでゐるところから、またポルトガル語からの翻譯にみせかけようとして、「ポルトガルのソネット」という現在の表題に改められたと言ふ。「カモエンス」(1524—80)はポルトガルの高位高官の出、著名な詩人であつた。彼はやはり各門の「カタリナ」と激しい戀に陥ちた。「カモエンス」は多くの詩を書いたが、就中、愛國の詩「ルシアダス」は最も著名である。その多くの詩篇は愛人「カタリナ」の靈感によつて書かれたと言われている。よつて彼女は「カモエンス」の「ベアトリス」と呼ばれる。「カモエンス」の一生は、作詩と彼女への憧憬とに織り成されてゐる。彼はポルトガルのヴァージルとも呼ばれてゐる。このような譯で、ブラウニングによつてこの詩篇は「ポルトガルのソネット」と呼ぶに相應しいと考えられた。それはともかく、この詩篇はバレットの「愛の書簡」に迫ることの出来るものと同一の情感に溢れた詩である。故に彼女の「愛の書簡」と併せ讀まれる時、詩の眞意が一層明白に理解せられる。

さて、本詩は全篇の四十四聯から成り、かの「愛の書簡」と等しく、純情の告白であるが、一は詩であり、これは散文であつて作者の特徴を何れが良く傳えているかは、詩と散文の何れをより好むかの讀者の嗜好に應じて

容易に斷定し難い。この「ソネット」は、彼女の救済、彼女の克服、彼女の讚美、疑惑、屈従の魂の發展の經緯を物語つて餘すところがない。もし眞實の愛の心が詩に表現されるとすれば、まさにこの様な詩であらう。詩は音楽に似ると言う。もし序奏、主部、終曲を適當に具えた十四行詩聯があるとすれば、これこそかかるもの一つである。われわれは、ここに眞實の愛の詩を見る。詩中に歌われる愛は、空想の所産ではなく、生々しい體驗であつた。恐らく、彼女はこれを書くにあたつて、心の底にイタリーの詩人ペトラークを偲びながら、この十四行詩の詩型を擇んだと言われている。ペトラーク、ミケランジェロ、シェイクスピアの如き、久遠の女性を限りなく追慕した愛人たちによつて、書き残された十四行詩聯を想起したとき、彼女は、はつきりと十四行詩聯による表現の機會を把え得たのであらう。申すまでもなく、これらの愛人たちは、何れも愛せられる女性ではなく、愛する男性であつた。ペトラークのローラ、ミケランジェロのヴイトリア、ダンテのベアトリスと雖も、彼女たちが、もし詩人、女の詩人、愛を受ける女流詩人であるとしたなら、男性の愛に應える機會がなかつたであらうか。

古來、女性の手になる戀愛詩の一般的短所は、恰も男性の立場にあるかのように描かれ、女性としての體驗に基づくものが尠いと言われる。男女の戀愛關係は、通常女性の消極的なるに反し、男性の積極的なるが認められる。故に心理の經過に於て、時に例外はあらうとも、われわれが女性の言葉に耳傾けようとするのは、この受容的な反應的な、魂の告白でなければならぬ。バレットは、まことに、その體驗に於て受容的、反應的であつた。しかも「ポルトガルのソネット」に見るものは、この受容的反應的情感に外ならぬ。そこに歌われているものは作り事や空想ではなく、熱情の眞實さ、意圖の純一さに外ならぬ。

この詩を書くことによつて、バレットには二つの幸せが齎された。第一はローラ、カタリナを想起しつつ、し

かも尙自己の體験に徹して書き上げたものであるから、純粹に女性の立場を代表したものであり、第二は韻文によつて書き上げようとしたために、詩法上の幾多の修練を積むことにもなつた。パレットは、それまでも若干のソネットは書いたが、この詩型に對しては必ずしも精通してはいなかつた。少くとも韻律上の不備は豫想されねばならなかつた。抱いていた理想に忠實になろうと冀いながら、彼女はペトラークの形式を範とし、嚴密にこれに従いつづけた結果、その韻律にも、聽覺上にも幾多の改善を遂げたと言われる。技法の上からも、この詩は殆ど完璧に近いものと言われ、詩型に於ける技術的な練達と運用と手際とは、讀む者をして一種の爽快さを覺えしめる。批評家パデットも、「かくの如く讀んで素晴らしいイタリー風のソネットをみることは、英語では稀有なことであり、同時に悦ばしいことであつて、言葉の一つ一つは巧妙というよりも、優雅にびつたりとその所を得てゐる。」と評してゐる。

次にこの詩の梗概に移らう。「最初に、いかにして、ブラウニングが現われて來たかが語られ、彼がやつて來る迄、死の腕にとりつかれてゐると、「源とした聲」——この聲は、常に彼ブラウニングを暗喩するに用いてゐるのであるが——「死にあらず愛なり」と答えるところで第一聯は終る。かの「ハムレット」劇に於ては、「生か死か」の命題によつて、ハムレットの懷疑的性格が示現されるのであるが、ここでは「死にあらず愛なり」の命題によつて、死と愛の問題に惱む性格が提示される。

この「源とした聲」を聽くものは、神と愛人と彼女の三人である。初め彼女はその聲を信ずることが出來なかつた。しかしこの聲によつて生きることの可能なることを自覺すると、たちまち彼女は自己と彼との間に横わる距りを知つて羞じらつた。彼は素晴らしい天分と活動の社會をもつてゐる人、彼女は「哀れな疲れ彷徨う唄い女」(三聯)に外ならなかつた。彼女は自己の悲惨な姿を思い、彼に立ち去るよう冀う。もしも、そこに彼が留つて

いると、彼女の生の焼灰は彼の額を焦がしてしまふからである。かくて彼女は立ち去れと命じながらも、一方女の夢を育ててくれる。彼女は、その夢の中に彼と共に生きること満足する。第七聯は彼女の生涯が彼の影響によつて、どんなに變化したかを記述する。彼は彼女の生活に「新しい律動」を與えてくれたが、それに對して十分な報いをする事が出来ぬので心苦しむ。それは彼女の感謝の念が足らぬためではなく、貧しさのために他ならない。

男の熱情に黙従しながら、彼女は自分の微弱な力で叶う限りのものを報いようとする。しかし、

私は悲しくも明かします。こんな

贈物を捧げる私みたいなものは、きつと

物惜しみと言われるに違いないことを。(九聯)

彼女は彼を愛するが、それは空虚な所有物として愛をば彼に與えるのではない。神は貧者の一燈でも、輕視し給う筈はない。されば、愛する魂であれば、決して値打のない筈はないと彼女は考える。愛することによつて彼女は崇高となり、與える恵みのためにこそ自ら純化する。彼は籠となり、愛によつて彼女は彼の教えに従つた。彼女の思ひは、言葉にも言い現わせぬほど深い。もし彼女が言葉に言い現そうとしても、それは彼を通して自覺せしめられる喜びではなく、自らの悲惨を表白するに外ならぬのであるから、彼女の沈黙こそ、彼に訴える女性的な雄辯な言葉なき言葉であるに相違ない。

いゝえ、私の女らしい沈黙で女の

ブラウニング夫人「ポルトガルのソネット」

この愛をあなたに信じて頂きたいのです。

(十三聯)

更に純情の逆る第十四聯では、

もしどうしても私を愛して下さるのなら、ただ

愛のために愛して下さい……

……………

だが永遠の愛を通して あなたがいよいよ

戀いまさる愛のために 愛して下さい。

(十四聯)

彼女は自分のためにも、心遣いのためにも、優しい言葉つきのためにも、愛されたくない。ただ愛のためにも、愛されることを冀う。二人の間に交わされた書簡の中で論じ合つた「不合理な理由」'irrational reason'こそ永遠の愛の保證であつた。詐偽の愛、肉體の愛、可見の愛は、やがていつの日か滅びの時がくる。しかし、肉體を超えた、不可見の、言葉にも現れぬ愛こそ、永遠の愛、至上の愛と考へたのである。ここにわれわれは彼女の求めに求めたものが、至上至純の愛であることを思わねばならぬ。この第十四聯の調べは、愛の理論は後に第四十三聯に歌う趣意と呼應し關連する。

あなたを愛します。神とその恩寵を

目には見ず心で感ずるとき、人の魂の

達し得る深さと、廣さと、高さで。

(四十三聯)

何という純潔な告白であろうか。限りなき愛の調べであろうか。彼女は更に、彼と一緒にいるとき、悲しそうな冷やかな自分の様子に對しても、悲しみのために閉じ込められているのだから、嬉しそうな表情を示そうとしても出来ぬことを辯解する。しかし彼女の脆弱さも、危惧も、勵ましてくれる彼の信念によつて克服される。

何故に征服は

下に押し潰すと同じように、立ち上らすにも

力強く完きことが出来るのでしょうか。 (十六聯)

第十六聯では、彼が一言命じさえすれば、すぐにも従うことが出来るという心境の移り變りの相を叙す。彼女の心は、もはやすつかり征服されてしまった。そして、はるかに優れた詩人の彼に、どうにか役立つ希いに詩はつづく。

愛する君よ、私を何に一番役立てたいの？

側で楽しく歌わしたいの。それとも

あなたの歌に交る妙に悲しい思出のためなの？

あなたが、そこで奏でる木蔭のためなの——棕櫚か松かの。

歌をやめて慰う墓のためなの、いゝようにして。 (十七聯)

次に彼女は一房の金髪を彼に與えようとの衝動をおぼえる。彼女は「葬式の鉢」が最初に切斷することと思つたけれども、愛こそは許されると考へる。そして彼は、そこに彼女の母が臨終の際、そこに接吻してくれたことを知るだろう。第十九聯は一房の髪と髪とを交換して、もう決して離れまいとする彼女の翼いは一途であるが、詩

調やや粉飾誇張に過ぎて、從續する詩聯に比して切實感に乏しいのか。過剰の作爲、街學的な挿入は、却つて澄明な純一さを損うものと言えよう。しかし第二十聯に目を轉ずれば、そこに展開せられるすばらしい回想に胸を打たれる。即ち一年前迄は、彼女は無神論者の愚鈍さに似て、今日の前に眺める愛人の出現を神聖視することが出来なかつた。所が今は彼に心の「郭公鳥」となつて、春の訪れを知らせ、生命の再生を繰り返し唄つてくれるように、ただ無言の時も、心では愛することを忘れぬように切願する。第二十二聯では、二人の魂は立派に對等の高さまで高められ、びつたりと融合する。天使たちは二人の沈黙の中に金色の音楽を滴らすかも知れぬが、寧ろ天國よりも、地上に止り、死期の來るまでは、何物にも邪魔されることもなく、世俗を離れた二人のみの生活を樂みたいと考える。

元來、この十四行詩の一つの魅力は、純一の情感が、多様な展開をみせて、時間的な経過に於ても、空間的なひろがりにも、體驗と想像とを連綿と重ねながら、しかも全體を貫く新鮮さを失わぬことであろう。光明の現實と理想の希求と、至純の回想とが、こまやかに配置され、精妙に展開されている詩で書かれた一聯の手紙と看做される。各詩聯は必ず次の聯に脉絡を保ち、日附こそつけてないが、心情の蕾が、次々に花を開くような趣がある。正しく美しい詩で書いた手紙の印象である。

扱、次の回想は、彼の生活が、彼女なしには如何に寂寥を極めたものであるかを述べた彼の言葉についてである。これは誇張した驚きではない。既に彼の生命は、彼女への愛と、その恵みによつて、豊富なものとなつていた。

愛する君よ、そんなにまで想つて

下さる手紙を読んで驚きました。私はあなたのもの——

でもあなたにとつて、それほどのものか知ら。

(二十三聯)

第二十四聯は、結婚の時を考える感動が主題となつてゐる。「二人の富も貧もただ神に委せて」結婚生活の至福に浸らうとする。彼女は永くつづいた悲しみと病苦にさいなまれ、この世に絶望し、死によつて神の胸に救われようとした。その時、忽然と彼の魂に逢い、現世の肯定感に復活した。死の救済から生の救済への轉換であつた。この世の絶望から神の愛を冀つたもの人間愛への自覺である。かくて彼女の勇氣は、凛とした聲に相應じいま雄々しく奮い立つ。有限の生命の中に、無限の歡喜を直感する。無限の神の世界にも劣らぬ生命の融合の極致に到達するのである。超自然の憧憬から、一步踏み止まつて、脚下に目を注ぎ、人間性の内實に徹しようとするのである。彼女の魂は、彼の魂に打ち纏る。

私の心はその

沈潜する性質故に沈んでいつたけれど

あなたの魂は星と定めなき運命の界を

取りもちながら、私の心を蔽うのでした。

(二十五聯)

彼女は幻想を友として、これまで生きつづけてきたが、いま、ブラウニングが目前に現われて、幻想はブラウニングに具象されて現實となる。天國で極樂の百合の花に圍まれながら、過ぎてきた地上の生活を悔もなく、ふり返る人のように、彼の愛が過去の生活を償つてくれるのを感じる。第二十八聯は彼の書簡について、最初の面接から、遂に愛の告白をするまでの心境の動きを叙している。しかも彼女は、いま、いかなる思いよりも、彼そのものを希求し、歸依し、離れ難く感ずる。

私はあなたを思いません——餘りに近か過ぎるのですもの。(二十九聯)

かくて彼女は涙を通して彼を求めてやまぬ。すると、

あゝ、近くに寄り添い

あなたは優しく助けて下さる。そして私の不安がつのると、

おゝらかな心で靜かに阻んで下さいます。(三十一聯)

彼女にとつて、性急に成立する愛は又急に憎惡に變じ易いものと思われ、又この愛は始めから、不均衡のものと思われてならぬ。病弱な身を反省してのこの思いは、洵に悲しい告白である。彼ほどの樂聖となればこそ、調子の狂つた樂器でも手際よく奏することが出来るのだから。しかも、それに甘えることは許されぬ。不均衡の愛とすれば、せめて幼き日の愛稱「バア」と呼んでくれてもよい。そうすれば、今は亡き母の代りに彼を愛慕することも出来る。

第三十三、三十四聯は、かかる調子で彼女の愛情を表白する。第三十五聯は、決斷と躊躇との交錯した心情に迷いながら、最初の決心に迫つてゆく神經的な苦惱と焦燥との叙述である。

もし私が凡てをお委せすれば、その代り

あなたは凡て私のものになるのでしょうか。私は家庭の楽しい團樂

互に交わす日頃の接吻をみ失わぬのでしょうか。

仰ぎ見て、この家ならぬ

他の家の屋敷の新たな境に入ることを

異様な感じがしないでしょうか。

いゝえ、あなたは心變りを知るには餘りか弱い

生氣なき眼で占めた場所を私で充たしたいのですか。

(三十五聯)

愛すればこそ、惱ましいのが人生であろう。愛は愉悅にも増して苦悶を伴う。愛の悦びに陶醉せんとする身にとつて、醒めての後の寂寥を思う理性の冷たい聲を聴くのは、耐え難い。しかし、至純の愛は、永遠に冷却しない。冷却するかとの怖れを抱くことは、却つて洵の愛の冒瀆であり、不純な理知のなせる仕業であるのか。己が偽りの心をもつて聖なる心を歪曲してはならぬ。縋らんとしては危み、信賴せんとしては迷い、こうした理性と感情との葛藤を経て、一度、二度と誓いを重ね、生命融合の境に没入する。

それからは、ほんとに

私は誇りやかに申しました。「脊の君、わが君」と。

(三十八聯)

第三十九聯は、彼女の感謝の言葉であり、それにつづく聯は、世の常の人の愛に比べて、彼の愛がいかに異なるかを比較對照する。

けれどあなたは、こんな

愛人とは似もしない。愛する君よ、あなたは

悲しみや病氣の間は魂の結ばれを待つて下さる

そして人々が「時遅し」と叫んでも、まだ早いと考えますわ。

(四十聯)

ブラウニング夫人「ポルトガルのソネット」

精緻を極める第四十一聯は、そのまま引用する以上に、より良い解説はあるまい。

私は心から愛してくれた人たちに

感謝と愛とを捧げます。やがては

聲の届かぬところへ、立ち去るのだけれども

市場通いか寺詣りに行く途中で

この圍いの壁近くしばし佇み私の音楽に

耳傾ける人たちに、深い感謝を捧げます。

けれどあなたは、さめざめと泣き沈む

私の聲に耳澄まし、涙にぬれる

私の言葉を聞くために、あなたの聖なる

樂器をその足許にとり落します。

教えて下さい。あなたに、いかに感謝すればよいかを

お、私の魂の思いに言葉を與え

耐えしのお愛を敬うには、消え去る生から

私の魂の凡ての思いを未來に向つてどうして放てばよいかを。

(四十一聯)

こうした心情で、「私の未來は、清らかな過ぎし日を寫さぬだろう」との確信に達したことを回想する。もとより過ぎし日は、清純な生活であり、思出深い幾頁を重ねたのであるけれども、今よりは、ブラウニングから與え

られる最高の恵みである新しい未来の頁に人生の意義を見出そうとする。

私の新しい天使よ、この世に全く望を絶つて

私の未来の新たな碑文を書いて下さい。(四十二聯)

終りを飾る第四十三、四十四聯が終曲となつてゐる。最終聯の第四十四聯は、彼から贈られた花々をいつくしみ、部屋に飾つたように、この詩簾とその真情を受け取つてくれよとの希望を叙す。故にむしろ、第四十三聯が事実上の終局と看做される。そこにはブラウニングに對する彼女の敬慕の深さと巾とが示されている。

どんなに私はあなたを愛しているか、その仕方を語りましょう。

私はあなたを愛します、神とその恩寵を

目にはなく、心で感ずるとき人の魂の

届くかぎりの深さと廣さと高さで。

私はあなたを愛します、日光と夕明りの間

日日の一番静かな要求の水準で。

私はあなたを心のまゝに愛します。人が賞讃を避けるように。

私はあなたを愛します、私の失つた聖者と共に

失われたような愛をもつて、——私の凡ての人生の

吐息、微笑、涙をもつて愛します——もし神の意に叶えば

死後も いよいよ あなたを愛しますわ。(四十三聯)

まことに澄み切つた真情の披瀝というべきである。各行それぞれ純一の魂の告白であるが、就中、第八行は純情という言葉の意味の中でも、至純の銀色を放つ透明さである。

さて、全篇を顧みて、女性の心情を女性によつて記録した珠玉と言つて過言ではあるまい。この詩篇は想像の翼にのせた女性の浪漫的な空想ではなく、飽くまで體驗の深さに脉搏つ真情の告白である。私がかこまでその視線に焦點を合せながら、辿つてきたオスバード・バレット Osbert Burdett の言葉をその儘引用すれば「言葉の美しき澄明さ、その穏やかな表現、その感動の精妙」は現し得て餘すところがないと言えよう。

古くより、生命の體驗的把握から「世界をその深奥に於て綜合するもの認識」という體驗を更に超えて、神の認識に到達する展開を示す例を、例えば、ゲーテ等にも見ることが出来るが、バレットに於ても「純白の神の玉座をふり仰ぐ、訴えるような生の天使の眼差し」(四十三聯)によつて、前半生の生涯の幕を閉じ、後半生への幕が切つて落され、「神の意に叶えば」(四十三聯)女性として、永遠の男性に對する憧憬をひたぶるにおし進める。バレットのブラウニングに對する純情は、神に向う心、神を求める心に外ならぬ。空想や學的認識によるのではなく、生命の眞實の體驗的直感を透して把握される。ブラウニングが久遠の女性としてバレットに對したならば、バレットは正しく女性の立場から、久遠の男性としての彼を憧憬するのである。この憧憬は結婚という人間關係の成立によつて、消え去るものではなく、絶えず背後に天使の導きの手を感じながら、永遠に純化されてゆく。人間的愛の崇高なるものをこの詩に見る。申すまでもなく、この詩をゲーテの體驗告白の大作に比較することは、規模の雄大さに於て、完成の期間の長さに於て、詩籐の量に於て、やや妥當を缺くであろうが、生命體驗の告白という意味に於て、魂の救済の跡を叙する點に於て、絶望の底から人間愛に目醒め、やがて神の愛に

と純化する點に於て、この詩の價値は、考えらるべきものであろう。優れた作品の中には、虚構と變形を通じて眞實なるものを象徴するものもあるが、この作品は、事實と體驗とによつて、同じく眞實をこくめいに描き上げた秀逸である。

文體も用語も單純平明である。バデットも、「恰も愛 (Love) の字が全體の鍵となつてゐるかのよう、終始用語は殆ど全部單綴語であるのに氣付く。」と評してゐる。ブラウニングも、その用語の平明さ、表現の和かさ感動の精妙さを、いかばかり、彼女の詩才として賞でたことであらう。恰も彼女が、ブラウニングの劇的獨白詩を詩型の高位に屬すべきものとして、賞讃してゐたように、ブラウニングは妻に多くを與え、結實せしめた。この「ポルトガルのソネット」もこうした恵みの結實したものに外ならぬ。しかも、かかる結實をその生存中味い得たブラウニングは、世にも幸福と言わねばならぬ。

使用の原書

Poetical Works of Mrs. Browning, London, Collins Press.

主要参考書

Osbert Burdett : The Brownings, Constable and Company Limited, 1929.

尙本稿は高松經專人文科學研究所研究會にて發表したものを、若干加筆したものである。